

こんにちは。いよいよ師走に入りましたね。

11月11日配信の「あおり歴史トリビア」第234号で、浅虫臨海実験所（現東北大学大学院生命科学研究科附属浅虫海洋生物学教育研究センター）の初代所長を務めた畑井新喜司についてお話ししましたが、さらにもう少し続きです。

畑井は国際的に活躍する生物学者でありましたが、親しみやすい人柄で学生らにも慕われたようです。また、彼が長く研究対象にし「生涯の友」としたミミズに関する著書『みみず』（1931年 改造社）の冒頭に「蚯蚓礼賛<sup>みみずらいさん</sup>」という一文があります。そこには、地上に利を求めず、悠々と土を食い荒野を拓いて肥えた土をつくり、その体は研究材料や薬などに役に立ち、幾億年も厳しい自然の中で繁栄してきたミミズに対する愛と敬意、そして彼のユーモアのある人柄が感じられます。

さらに彼の人柄を感じさせるエピソードに、臨海実験所の一面に縁結び地蔵堂を建立したことがあります。

実験所が建てられる以前、建設予定地近くの裸島付近は男女の身投げが多かったことから、それを弔う1本の供養塔が建てられていたのだそうです。しかし、実験所建設のためには処分しなければならず、それを聞いた畑井所長が地元の寄附なども受けて、代わりに実験所裏の海岸に男女一対の石の縁結び地蔵をまつりました。すると実験所や附属水族館を訪れる多くの人が参拝し、思った以上にさい銭が集まったので、これを使って地蔵堂を建立することになりました。大正15年（1926）7月28日に落成式と御安置祭が執り行われ、これには畑井所長や浅虫の有力者のほか、ちょうど来合わせていた東北帝国大学の小川総長も出席して式辞を述べたそうです（以上『東奥日報』大正15年7月29日付）。

畑井自身はクリスチャンでしたが、地元の人たちの慰霊の気持ちを汲んで、しかも縁結びの地蔵堂を建立したのは粋な計らいですね。



臨海実験所と裸島  
（『浅虫温泉名所図絵』、歴史資料室蔵）

また、浅虫温泉観光協会の方にお尋ねしたところ、いま浅虫水族館近くに祭られている縁結び地蔵尊は、以前は旧実験場付近にあったそうなので、これがその縁結び地蔵だったのではないかと思います。



浅虫縁結び地蔵尊



地蔵尊の縁起

その後、昭和9年（1934）に、畑井は当時日本の統治下にあったパラオに日本学術振興会所属の熱帯生物学研究所を設立して初代所長となり、東北帝国大学を定年退官後はパラオの仕事に専念しました。戦後は夫人の父が明治期に創設した東京の渡辺学園で新しい女子教育に尽力し、同学園が設立した東京家政大学の初代学長となりました。

畑井の死後、臨海実験所構内に彼がよく学生に言ったという言葉「それは君 大変おもしろい君ひとつ やって見たまえ」と彫られた記念碑が建てられ、現在も残っているそうです。

※今回の内容は『日本近代生物学のパイオニア 畑井新喜司の生涯』蝦名賢造著（1995年 西田書店）などを参考にしています。